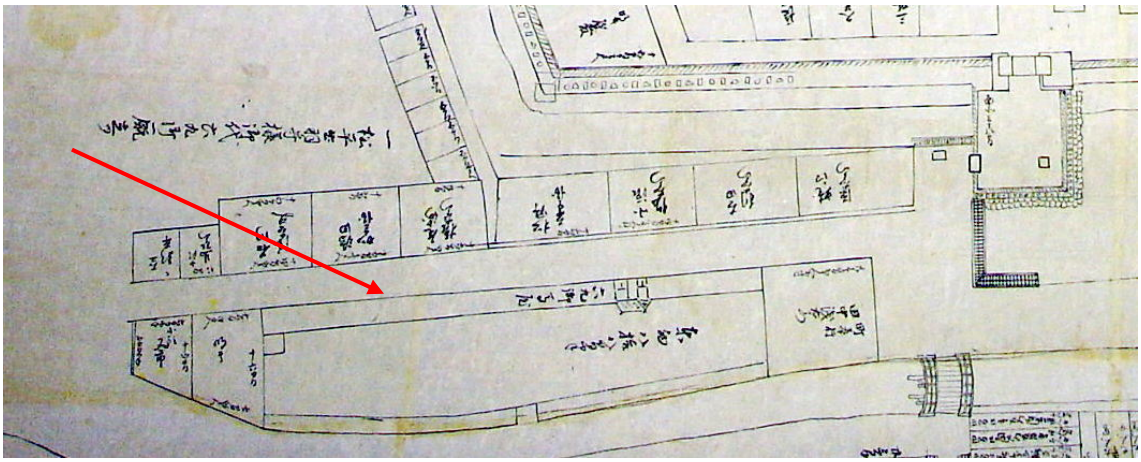
城下町探訪２ ２００９／４／９	うまや 六九町厩跡

六九町厩は松平直政が松本に寛永１０年（１６３３）入封して新たに造ったもので５４疋の馬が飼育されていたという。現在日本に残されている厩の遺構は唯一彦根城に残されているだけである。

彦根城　厩外観と内部

江戸時代城郭内の厩馬つなぎ部屋の造りが並んでいる。

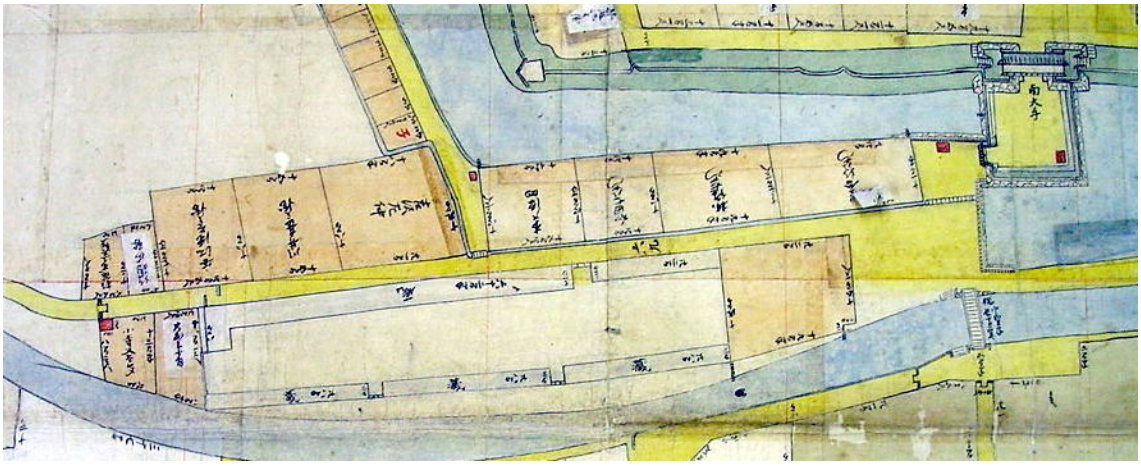


（元禄期松本城下絵図より）

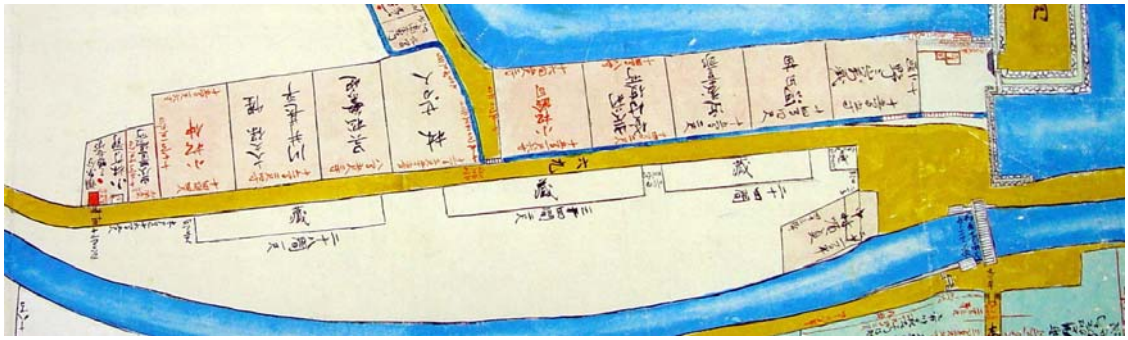
六九町の道の南側と女鳥羽川の間の道路側に東西８８間半（約１６１ｍ）の厩が造られた。信府統記は「・・南門の外川端に厩を造る、是を外馬屋という、また六九馬屋ともいう、五十四疋立（だ）ちなるが故なり、是よりこの辺を六九ととなえ来たれり」とある。内馬屋は本丸内にあった。

しかし、この厩は安永５年（１７７６）１２月１７日のいわゆる「綿屋火事」により焼失した。この時の火災は松本始まって以来といわれ、川北では西方面は六九厩、町役所、郡役所、御預役所より今町迄焼け、大手橋も焼け落ちた。その後、六九厩跡地及び道の北側

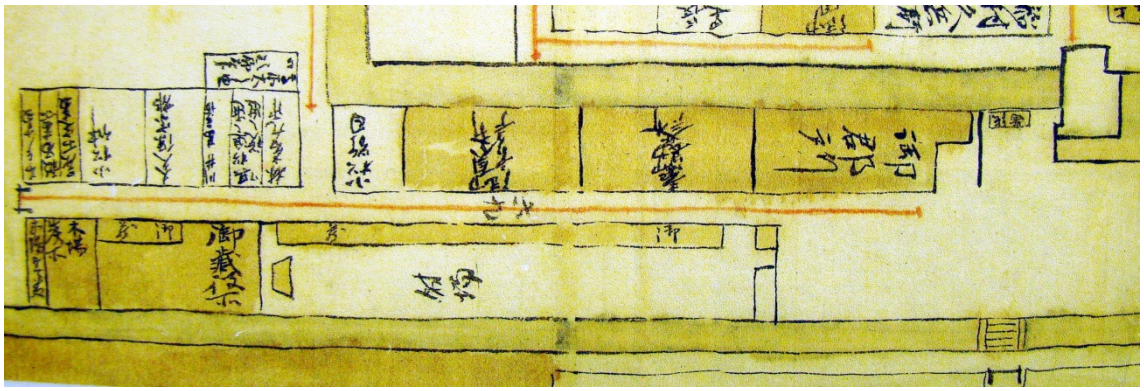
の士屋敷を移して、北側へ郡所・預所・町所を建て（後、安永８年町所を廃し郡所と合併して表勘定所をおいた）、道路南側の西方へは穀蔵を建てた。



享保１３年秋改松本城下絵図には六九町道路南側の川岸に蔵が並んでいる。



天保６年（１８３５）の松本南北深志絵図では蔵は道沿いに移動している。（此の絵図では道北の郡所・表勘定所・預役所のある場所が士屋敷になっており疑問が残る。）



幕末の絵図によると上図のように蔵の南側の区域は射場となっている。埜（あずち）が西側にみえ弓矢等の射場として使用された。蔵役所はその西側にあった。

明治維新後、此の地は下図のように開産社の敷地となった。明治７年（１８７４）筑摩県より勧業社が設立され資金を蓄積して民間に融資し産業を発展させるのが目的であった。明治７年末社名を開産社と改めている。六九町の道より南側は開産社の施設が並ぶこととなった。

（長野県町村誌南信篇より）

旧藩の御蔵役所は開産社の事務所となり、旧藩の米蔵は改修されて展覧会場と織物工場となった。射場はリンゴ･梨･杏･葡萄･桜桃などの果樹の植物試場となった。また女鳥羽川の水力を利用して臥雲辰致のガラ紡も設置されていた。かくして、六九厩跡は殖産興業の発信地となったのである。

しかし、明治９年筑摩県の廃県により大打撃を受け民間に移管され、明治２１年に解散している。